

ISSN 2186 – 3989

笠原祥士郎著『王充思想研究』

朋友書店 2020年7月 A5版 379頁

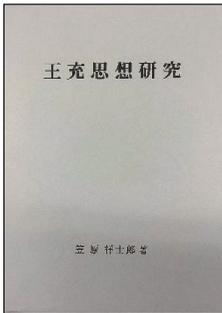
国際コミュニケーション学部 教授 村田 和弘

北 陸 大 学 紀 要
第50号(2021年3月)抜刷



笠原祥士郎著『王充思想研究』
朋友書店 2020年7月 A5版 379頁

北陸大学 国際コミュニケーション学部 教授 村田和弘



本書は王充思想の真の姿の解明を目的としている。王充（後漢光武帝建武三年西暦 27 年～後漢の永元年間）は「合理主義を進展させて、天人感応を中心とする災異思想や讖緯の学とするどく対立」（近藤春雄著『中国学芸大事典』大修館書店、昭和 53 年初刊）した後漢の批判的思想家として知られる。著者は研究者としての人生をスタートさせた時から一貫して王充研究に取り組んできた。東北大学大学院中国文史哲研究会刊行『集刊東洋学』62 号 1989 年 11 月発表論文を皮切りに、北陸大学で教鞭を執る現在に至るまで集積してきた王充研究の発表論文を一書にまとめて世に問うたのが本書である。その「初出一覧」（379 頁）に各章のもととなった発表論文の初出掲載誌と刊行年が見える。それを見

ると第二章から第八章まで、発表順に論文が並ぶ。ただ、王充の人生と学問の経歴を述べた第一章の論文は最新論文（2019 年 9 月）であり、必然的に他論文での論考結果を承けるものであろうが、王充理解の土台を為すものとして序論に置かれる。このように本書は著者の一貫した視座のもと、長年にわたり積み重ねられた王充研究の集大成である。同じ職場に勤務する者の特権を活かして評者が尋ねたところによると、刊行にあたって大幅な加筆訂正は無いとのことである。目次を掲載して本書の構成を確認すると、以下の通りである。

まえがき

- 第一章 王充における人生と書
- 第二章 王充における認識と実践
- 第三章 王充における自然と人間
- 第四章 王充における鬼神と祭祀
- 第五章 王充における偶然と必然
- 第六章 王充における宿命と実践
- 第七章 王充における孔子と孟子
- 第八章 王充における天与人
- 第九章 王充における儒家と王朝

あとがき

「本書の各章は、筆者なりに設定したこれらの問題意識について解釈、説明するという形式をもとに展開している」（「まえがき」ix 頁）と著者自らが述べるように、本書では、著者が重要と考

える問題点について、王充の著作である『論衡』各篇から、その論説を横断的に引用しながら、王充自身が語る言葉を著者が解説を加えて論点の整理をしていき王充思想を解明するというユニークな方法を採用している。こうした方法が採用されるには、しかるべき理由があろう。評者が考えるに、王充が『論衡』を通して提起した諸問題は、決して王充に限られたものではなく、広く普遍性を持つものであること、さらに言えば、古代中国の儒家思想における核心的問題と位置付けられるものであるという著者の意図がそこには存在するであろう。各章（すなわちもとになった論文）の題名がすべて「王充の」ではなく「王充における」となっていることが著者の意図を端的に表している。

本書で提起される諸問題は、例えば『中国思想文化事典』（溝口雄三・丸山松幸・池田知久編、東京大学出版会 2001 年 7 月刊）の項目の中に、ほぼすべてを見出すことができる。天、[気]、自然、[物]、命、性、[聖人]（以上 I 宇宙・人論）、[天下]、[国家]、災異（以上 II 政治・社会）、鬼神、道教（以上 III 宗教・民俗）、知、学校・書院（以上 IV 学問）などの項目での解説内容と関連し、なおかつ、[] で括った項目以外では、濃淡の差はあるものの、解説中に王充『論衡』が言及される。つまり、著者は王充という特異とされる思想家の、その特異性に目を向けるのではなく、中国思想の展開に一石を投じた思想家として捉えなおすことを企図しているのである。王充の各論点についての論説を通しての著者の考察はいかなるものか、以下に各章の内容を確認して行きたい。すでに著者により各章の内容は簡潔にまとめられているが（「まえがき」vii 頁）、ここでは評者の関心に沿って著者の論考を辿ることとする。

第一章では王充の人生と学問経歴が述べられ再検討される。『論衡』自紀篇及び『後漢書』王充本伝の記述を否定する研究者もいること、伝記資料に対する学術的評価の領域に唯物主義思想家として顕彰したい側とそれを否定したい側の立場の違いがあることが示される。著者はここであらためて厳密で公正な本文読解のみに基づいた王充の経歴と学問態度を描出しようとする。自紀篇では、まず父祖の代まで遊侠の徒であったという出自が述べられる。多くの研究者は遊侠の血をひく王充が儒者として父祖の遊侠性を非難したと解釈し、そこに批判精神の萌芽を見るが、著者はこの解釈に異を唱える。宮崎市定氏の唱えた遊侠の儒教化という社会現象に着目し、そうした時代の趨勢に順応して優秀な息子に父が学問を学ばせたと見るべきである。自紀篇に見える父祖への言及は、自己の内部に於いて実行された遊侠から儒者への転換の自己認識の表出であり、遊侠という出自と批判精神とを関連させて論じることの不可なることを述べる。そうではなくて、王充の合理的批判精神は書館、太学での学問過程に求められるというのが著者の意見である。自紀篇において王充は書館、太学での儒生たちの学問態度に対する強い批判のこぼれをつづる。彼らの師法を守信するだけの学問方法に不満を抱き、博学へと傾倒し、批判哲学の基礎が築かれたのだと。すなわちその批判性は学問の対象と方法の偏りに向けられているのである。王充は殷周の六経と秦漢の事を同列に論じ、そこに価値の上下を認めず、思考の結果として漢王朝賛美を表明することとなる。この点が後世から合理的批判精神の限界であるとか自己保身であると非難される所以となるが、むしろ著者は政治的追従のような考え方を否定する。著者が重視するのは、王充が、自分の著作物が当時、その中身が十分に検討されることなく、出自ゆえの批判的意見ばかりであったと述べる点である。思考停止状態の学問風潮への批判的精神を見るべきだとする著者の意見には賛同できる。かくして自紀篇後半は父祖の出自を語る前半と呼応する構成であることが解明される。

第二章は王充思想の核心をなす存在論について議論が展開する。王充は世界を物・気二項からなると捉える。物はすべからく気よりつくられ、陰気と陽気の相補的な関係のもとに物が形作られる。気は世界に存在する物すべてを貫くものであり、気のもとにある万物にはしたがって均質性が担保され、形相下の異なりはすべて気の濃淡の違いにより説明されるとする。そして気のはたらきはおのずからなるものであり、そこにはいかなる天の有意志的なはたらきかけも認めないとする立場が述べられる。天を自然無為なるものと規定したうえで、天の介入を認めないとい

う主張がなされる。これが当時の思想を覆っていた災異説、讖緯学、天譴説などへの批判の源流である。ところで、物の均質性の議論からは、王充の合理的判断が導かれるが、さらに重要なのは、人も物と同様に気によって構成されるとする点である。気の特異性が人の個性を生み、気はおのずからなる原理ではたらくため、そこに人の意志の介入する余地はない。これが王充の宿命論である。一方で王充は、人間の有為性も認めようとしていると著者は述べる。人は物や他の動物と異なり普遍的道徳と社会秩序を求める。こうした利欲は偽性ではあるが道の真性と本質的には異ならないとし、人間は自然的存在でありかつ有為的存在でもあると位置づけられる。かくして人間の心は内在する天となり、存在と認識の統一が果たされていく。ところで、天を自然無為的な天と規定することで、王充は当時支配的だった天人感応説を否定した。天のもとにおいては聖賢も愚夫もともに耳目からのみしか天は計り知れず、その意味において等質である。ここから王充の孔子と雖も神聖不可侵扱いをしないという聖人観がうまれる。明末の異端児李贄の学説が想起されるが、明末においてすら非難を巻き起こしたテーマを後漢の時代に提起することに驚かされる。このように本章では、自然無為的な天、気のもとでの均質性、気による現象の合理的解釈、宿命論、天人相関説の否定、聖賢と愚夫の等質性など王充思想の重要要素が一望のもとに関連付けて述べられる。

第三章では気と性、気と命の関係が論じられる。無為自然なる気のもとに性も命も支配される。性に善悪があり、命に貴賤があるのは、生得的な気の凛受の差であり、固定不変的なものである。ただここで王充は等質性を根拠として君子と小人に異類というほどの差がないとし、凛受した気により性に正性、随性、遭性の三種を設け、遭性の場合には後天的に性を変化させる可能性を強調する。つまり性に可塑性と不可塑性とがあり、中人以上と中人以下として『論語』などに言及されるのをその根拠とし、聖人の教えによる人間の側からの働きかけについても積極的に許容する。また命についても同様であり、凛受の気の量と質とにより人間の命の如何が支配され、そこに人間が影響を及ぼすことはできない。命は自然的道家的なものとして述べられる。一方で、『論語』の孔子の言葉などを根拠として人間の有為性の余地をも認めようとする。命を支配する気には人気と衆星の気とがあり、衆星の気の下位に個人を超えた外在的な国命あるいは録など推移する要素を認め、人間は気により重層的に支配されると述べる。また遭遇、幸遇など他者が関与する要素も認める。著者はこうした解釈の幅を、王充における孔子と同様の合理的精神態度の表れとみなす。王充の命の解釈には道家的自然的なものと儒家的なものとの併存しているのであると。儒家三命説のうち随命を認めないのはやはり王充が天人相関説を否定するからである。したがって人間は二重に命から疎外されている。自然的な気の凛受と他者との関係である。人間の有為性と自然性の関係について、王充は、それでも人事が気に影響を及ぼし得る場合があるとする。無論、気に有意志的的目的的性格があって感応するのではなく、人間の善悪にいわば機械的に感応する。そこに気の均質性が働くためだからだと述べるのである。人間の為すべきことは自然に合致した礼法の確立にあり、そこにおいて真なる自然と偽たる人間との融和が見られ、人間による自然への積極的な働きかけが求められる。人間は自然により生かされるが自然は人間により認識されるべき存在でもある。人間と自然は相補的な関係にある。この関係を認識しつつ人間を導くことのできるものが聖人と呼ばれる。著者は王戎のこうした思想を踏まえ、王充評価について再検討を加える。王充が空前絶後の批判主義者と評されるのは、ほかならぬ孔子の言行に対してでさえその言説の矛盾点を批判するからであるが、王充は自己の論説の根拠にしばしば孔子の言説を以てする。王充は孔子という存在や儒学思想体系そのものを批判の対象とはしておらず、世儒が孔子を神聖不可侵な聖人であるとして思考停止してしまっていることを批判したのだと述べる。孔子のような聖人も賢人も気による均質性のもとでは絶対的存在ではない。したがって学ぶべきは孔子そのものではなく、むしろ孔子が学ぼうとした聖人の道であるはずだ。王充にとって自然的世界の中で生きる人間の指標としての聖業の探求のためには孔子への盲信は批判すべきことであった。著者によれば、王充はどこまでも儒家的

立場にある。漢代の儒家は道家の自然哲学を取り入れ、次第に天人相関説を整えながら神秘主義に陥っていった。王充は、自然の超越性を天の有意思的絶対性へと転化させて人間を支配するものとした漢代の気(氣)の思想を、おのずから然るものとしての気へと定義しなおし、合理的で普遍的な価値の再構築を目指し、気(氣)の自然無為の面と気(氣)に対する人間の有為性の面の二面性を認めながら、自然に人間を積極的に関与させようとした。『淮南子』など道家思潮の影響を受けながらも、あくまで儒家として新局面を切り拓こうとした思想家であり、機械的宿命論にいたった結果、唯心主義に陥ったとする批判に反論する。ただし、著者はそれでもなお王充思想に見える矛盾を指摘する。気(氣)の自然無為的性質と人事に対する機械的感応との間に整合的説明がなされていないこと、道家の自然主義と儒家の人道主義とが二重構造のまま自家撞着していることが指摘される。

第四章では王充の鬼神論について議論が行われる。王充は人間の生死を気(氣)の聚散にすぎず、死後に認識能力のある有意志的な鬼とはならないと述べる。いわゆる無鬼論であり魏晋に盛んに議論されたテーマである。王充は鬼神を気(氣)の自然的運動の一環として解釈し、人間の心の作用として鬼を捉え返す。曖昧模糊とした存在を否定するのではなく、気(氣)による自然的世界の一現象として認識し、迷信にとらわれる非合理的精神をこそ批判の対象とする。王充は厚葬を否定するものの祭祀自体を否定しないのは、それが祭祀する側の人間の心の問題だからである。自然的鬼神と祭祀の鬼神とを分離するという無鬼論であり、祭祀を人間社会における人為的文化装置と位置づけ、心情としての鬼神祭祀こそが孔子の合理主義にかなう方法であり、その意味でも王充の祭祀否定論に見える言説は儒家的立場に立つものであることが述べられる。

第五章では王充の宿命論が議論され、自然的世界における偶然論と必然論、気(氣)による支配のもとにある人間の行う主体的努力の意味についてが考察される。人間の賢不賢、尊貴卑賤と遇不遇とは関係がなく、多分に時に委ねられる。王充はそのうえで遇と揣(自然の動きに積極的に関与する方法)を区別するが、それでも偶然性は避けがたく存在する。行為と境遇には応報的因果関係は見られず、命は偶然性に満ちた世界を必然性の世界として認識するための概念としてとらえられる。人間は実践することで命を認識する。命には先天的な命と後天的な命とがあり、後天的な命は境遇により左右され、偶然性が高い。そこに人間の活動の意味が存在する。自然的働きという意味において、偶然性と必然性は必然的な命として融合され、人間は自然と対峙し自然を認識する主体的存在として生きることが求められていると述べる。

第六章ではさらに宿命と実践の関係が考察される。第五章で述べられたように、自然的命定論において、人間は畢竟、命の必然性の前に屈する。また、命は気(氣)の質量に由るとされ、それは科学的合理的精神とも言えるが、反面、観念的であり、王充の述べる気(氣)の実態は捉えづらい。本章では世俗の虚妄なる言説に対する批判的精神という視点から王充の宿命論が捉えなおされる。ここでの虚妄なる言説とはすなわち官位と才能を関連するものとしてとらえる考え方に他ならない。当時の官吏登用制度では、官位の低いものは智能、行操において欠陥があるとみなされた。王充はそこに遇不遇や時の偶然性の関与を述べ、偶然性を一定の理法のある秩序立ったものとする根源的な原則として命を設定する。命は死生寿夭の命と富貴貧賤の命とに分けられ、禀受の性であり気(氣)の量により先天的に決定されるものと、気(氣)の質により決定され生得的であるが性のごときものに分けられる。あるいはまた彊弱寿夭の命と当に触値すべき所の命とに分けられる。前者は死生寿夭の命と同様に気(氣)の量により命が決定されるとするが、後者は兵焼圧溺の類であり、後天的偶然的な遭遇である。人間にはいわば社会的運命があり、その類である国命は広く天下を蓋い個人の命を決定する。そして国命は統治者の賢不賢や明不明とは関りがなく、歴数により決定される。天人相関説は否定され、かつ、すべての偶然性は必然性のもとに包摂され、個人の命と国家社会の命とが重層的に捉えられる。これが王充の宿命論である。このような自然的世界のなかで、人為は命を補助する働きとして措定される。ここで著者は王充の性命論に分け入り、先賢の言を引用した王充の性命論を性と命の乖離の認定にあると述べる。すなわち両者間の

因果関係の徹底的な否定である。ただ、その場合の性を操行の清濁に限定し、凜受の生得的気による性と区別した上で、その可塑性を主張したのだと述べる。孔子の言う通り、上智と下愚は移りがたいが、中人は聖教に服する努力次第で性の変易を叶えることができる。王充の宿命論では、命の決定性は疑いようがなく、自然無為を受け入れつつ、だからこそ内なる道を求めて鴻儒を目指すべきである。王充は天人感応を否定し、現状の禍福から人間の善悪を解放したに過ぎないという胡適の評価を引きつつ、王充を過激な儒教批判ではなく、合理的儒者とすべきことを述べる。

第七章は王充の儒者批判が述べられる。孔子、孟子さえも批判の俎上にのぼせたが故に王充は批判思想家と高く評価され、その著書『論衡』も後世に伝えられたが、同じ理由により伝統の破壊者、不敬なる異端者ともされてきた。著者は『論衡』に見える孔子の引用を検討し、多くの場合で王充は孔子に依拠して自身の論を展開していること、孔子の言説の矛盾を批判する場合でも、孔子のことばを場面や状況から再解釈していると述べる。つまり王充の孔子批判は孔子の儒家としての思索を再検討することであり、むしろ王充の批判の矛先は、そうした再検討を試みようとしなかった当時の儒者の儒学の学び方に向けられていたことを明らかにする。当時、俗儒は孔子を神聖視し、神格化していた。孔子を聖人とするあまり不可知の領域も可知とするが、聖人孔子の認識方法も思索と類推という点では婦人と変わるところはない。王充は不可知の領域のあることを認めたくて、問うことの重要性を述べる。王充は凡人も聖人の域に達することができるとし、不可知の領域を知り難き事と知る可からざる事の二つに分ける。前者は問うことにより知ることが可能なものとするが、後者は聖人も知り得ない絶対不可知の領域とする。そうすることで孔子の神格化から脱し、学ぶべき模範としての孔子観の確立を意図した。王充のこのような批判的『論語』読解は、孔子を追難するものではない。当時の儒者の学び方は古に関する六経について師法を盲目的に守信するのみであり、今の秦漢の事には全く無知であった。学問方法も虚説を一旦生み出すや、その虚説が考実されることなく継承される。孔子に問い質してでも真意を極めようとしなかった孔子門下七十弟子も今の儒生と何ら変わらないと非難する。知を極め、聖業を伝えるためならば、たとえ孔子の説を論難したとしても理に背くことにはならない。問孔篇と刺孟篇は言説の矛盾を批判しながら経書に近づく道を確認するものとして書かれたと著者は述べる。王充にとって知識は古に閉じたものではなく、今に存在するものであった。

第八章では天人感応思想批判に焦点があてられる。著者によると『論衡』八十二篇のうち二十篇の言説において天人感応批判が見られるという。天人感応説とは、天を人格的存在と考え、人君の政治が失われると天がそれに対して譴告を与えるために自然の災異をもたらすという説であり、董仲舒などが主張した儒家的統治論である。王充は天を道家的無為自然的天として捉え、天人感応説は統治の方便にすぎないと否定する。そもそも人間世界の禍福は命によるものであり、天は因果応報、勸善懲惡を実行する人格的天ではなく、摂理をつかさどる主宰的天である。しかし王充は全ての感応を否定し去るわけではないと著者は述べる。気同質性にもとづく媒介作用により、人間の働きが気になんらかの影響を及ぼし調和に達する可能性が認められるとする。だがそれはあくまで天が人に影響を及ぼし得るのであって、その逆では決してない。宿命論に見られる適や偶あるいは国命といった概念がここでも繰り返される。君主の徳治の可否と国家の治乱とは直接的因果関係にはない。だが君主の徳治の必要性は否定せず、国命の補完的働きと定位する。儒者としての統治論を破壊することはしないが道家的天との融合を図る思想的展開でもあった。『淮南子』の継承発展ともいえるものであり、魏晋の思想へ繋がるものであったと著者は述べる。

第九章では頌漢論が考察される。批判精神の限界、批判精神と現実との調和の表れ、政治的追従、思想的二面性や矛盾などと非難される一方で、天人感応説批判と宿命論を基盤として経伝の伝承内容を批判的に再解釈した後、同じ思想的土台で現実の漢王朝を論じることにより生じたものであり、すぐれて批判精神の発露した結果であるとする説もある。著者は後者の立場に立ち頌漢論の意図を過度な尚古主義から生じる虚妄な言説への批判と現実の聖世の後世への伝承へ

の使命感という視点から検討を加える。世俗の儒者は經典に記載されている聖帝出現時に現れる符瑞のないことを以て漢代に聖帝なしと論じる。王充は宣漢篇において漢代の聖帝について論じ、符瑞の時代による変化を認める。頌漢論に関する言説の見える篇は、著者によると、『論衡』全体の 27%に達するという。尚古主義への批判は時代を超える気の同質性、不変性に依拠した王充の世界観の表れである。今の事例の類推から古の言説の虚妄を暴くことが可能であり、今人の言行から古人の言行を類推することも可能である。虚妄な尊古卑近主義への信奉がはびこるため、眼前に良著があっても高い評価が与えられない現実がある。王充は楊子雲『法言』を挙げ、今著という理由で評価されないことへの理不尽を訴える。こうして尚古主義に依らない現王朝評価が可能となる。先帝明帝や今上帝章帝を正当に評価することこそが鴻筆の臣としての儒生の務めである。畢竟、『論衡』は頌漢論のために用意されたと考えられると著者は結論付ける。

王充が唯物主義者か唯心主義的かは王充思想と無関係の議論である。『蒙求』に「王充閩市」（王充市に關す）とあるように、中国文化伝統における王充像は、なによりも貧窮のため本が買えず、市中の書肆で立ち読みしてでも多様な学問に努めたその学問に対する真摯な姿勢にあったはずだ。王充を俗儒の虚妄なる言説から解放し、原文に即して真の姿を評価する必要のあることは、本書により十分に証明されたと思われる。

以上、本書で展開された議論を辿ってきた。もとより評者の力不足で著者の意図を汲み取れているか心もとないが、そのうえで、無知なるものは問うことこそ学問であるという本書の主旨に従って著者に尋ねてみたいことがある。本書読後に評者が関心を持ったのは、著者により取り上げられ考察された諸問題についての王充思想を、あらためて中国思想文化史上に置きなおしてみた場合、どのように評価されるかということである。

例えば天と宿命。著者も触れる（第六章 199 頁）司馬遷の嘆き「天道是か非か」（『史記』伯夷列伝）は、「仁を積み行ひの繋ぎ」伯夷、叔斉が餓死し、また、孔子の愛弟子顔回が陋巷で夭折したことに対して発せられた。司馬遷は前漢の人だが、歴史家として天と歴史の背理性に疑問を抱いた。善人に与しない天とはいったい何なのかと。王充の生きた後漢では、董仲舒の天人感應説が蔓延っていたが、著者が述べるように、王充の宿命論はこの軛から人間と天の双方を自由にするものであった。天と人間の境遇を切り離し、天を道家的自然的天とする立場は、結果として司馬遷の歴史家としての見識と同様のように見える。王充の場合はそれを気の集散、境遇の偶然性など多層的な弁別的考察を通して天との相関を認めない学説を確立したが、司馬遷より前に『淮南子』ですでに道家的天による解釈がなされていた。例えば、金谷治氏は次のように述べる。「…いわゆる諸子の書物の雑家的傾向は、恐らく秦からこの『淮南子』の時代へかけて、統一王朝の出現に伴う統一理論を要請する大きな歴史的要求に従おうとした結果のことであろう。そして董仲舒があらわれて儒教の輝かしい勝利がもたらされたが、『淮南子』は、そうした儒教の動きに対抗して、道家の立場から提出された統一理論の試みであった」（『淮南子の思想』243 頁、講談社学術文庫 1992 年）と。本書を読むと、王充は自然無為としての天を継承しながら、気による統一理論を企図したように見える。変化を必然とする気の性質がいかなるものか解明せず、命、運、偶然という弁別のままに放置したという評価もある（溝口雄三・池田知久・小島毅著『中国思想史』25 頁、東京大学出版会 2007 年）が、この点については、著者は個人の努力の有為性の余地を探索している。王充の気思想を基点として、『淮南子』などの前代思想と、魏晋以降の思想の中に見られる王充思想の継承の痕跡までを視野に収めた中国思想史は、どのように描かれるのであろうか、ぜひとも著者の意見を聞きたいところである。

最後に書評の常として、敢えて本書に瑕疵を求めるとすれば、キーワード索引が付されていない、各章に跨る論考の筋道が辿りやすくなるのではないだろうか。また、文字で気になるところも散見される。少し例を挙げると、12 頁 2 行目「教審令不遺誤者」の「遺」字は注釈にある通り衍字と認定して削除したはずではないか。14 頁 3 行目「肯局限于老師的家法章句」は「不肯」

ではないか。31 頁注 (33) 「くるしんで」は「くるんで」ではないか。243 頁 15 行目「実行したと」は「実行したこと」ではないか。250 頁 5 行目「達聞暫見」の「達」字は注釈で「遠」に改めたのではなかったか。292 頁 16 行目「不遂」は「不達」ではないか、などである。テキスト・クリティークにもとづく精読に重きを置く論考スタイルであるだけに気になる。

もとより、これら些事は本書の価値を減じるものではない。本書は王充研究を志す者の必読の書籍であるだけでなく、中国思想についての示唆に富む議論、とりわけ、天と個人の宿命をめぐる議論をはじめ、氣と性と命、鬼神、個人と世界など魅力的なテーマについての議論に関心を持つものにとって刺激的な内容となっているといえよう。集大成を上梓した後の著者による、さらなる研究の広がりを期待したい。